

## かかわりで育ち、かかわりを育てる子どもたち

## ～幼稚園児との交流を通して～

## 1. 設定理由

現代の子ども達を取り巻く環境は、とても複雑になっている。少子化や核家族化、価値観の多様化が進み、地域では人と人とのつながりが希薄になってきている。それは、子どもの世界でも同様である。日常生活で群れて遊ぶ子どもの姿を見ることはほとんどない。

1年生は、幼稚園や保育園にいた時は、年長さんとして下の子の面倒を見ていたり、一人で頑張っていたりしていたことが多かったはずである。しかし、小学校に入学すると、6年生を中心に自分のことを面倒みってくれる人が多く現れる。そのせいか、指示待ちの姿勢が多く、できることでも人任せにしてしまう様子が多々見受けられる。

そこで、安房地区生活科部会では、1年生と幼稚園児の「幼小交流」を通して、人とかかわることの楽しさが分かり、身の回りの人と進んで交流できる子ども達を育てたいと考え本主題を設定した。幼稚園児との活動の中では、「お兄ちゃん、お姉ちゃん」といって頼られてうれしくなったり、思うように動かない相手にじれたりする。その中で、相手の様子を見たり、気持ちを考えたり、自分自身を見つめたりすることになる。初めはぎこちなくうまく伝えられなかった言葉も、繰り返し活動を行うことで、つないだ手のぬくもりと共に伝わっていく喜びを感じ取っていく。その活動の中で幼稚園児とかかわったことを振り返る場を大切に扱うことで、次は、どんな声をかけようか、どんなことをして楽しませてあげようかななどと、次への活動の意欲が生まれ、自らかかわりを創り出していくと考える。

## 2. 研究仮説

- ①交流する機会を意図的に設定し、繰り返し行えば、人とかかわり方を身につけ、かかわりを楽しむことができるだろう。
- ②自他の気持ちや考えに気づくような振り返りの仕方を工夫すれば、自ら進んで人とかかわろうとする意欲が生まれ、かかわりを創りだす力が育つだろう。

## 3. 研究内容

- (1) 第1学年「みんな仲良し」の年間活動計画を作成する。
- (2) 授業実践により検証・考察する。

## 4. 結論

- 年下の幼稚園児とともに活動する場面を設定したことで「自分にもできた」「喜んでもらった」と一人一人が自己有用感を感じながら交流活動を楽しみ、人とかかわり方を身につけることができた。
- 幼稚園児と年間通して繰り返し交流活動をし、自他の気持ちや考えに気付くような振り返りを工夫したことで、かかわる力を磨き、よりよいかかわりの姿を求め、「かかわりを育てる」ことができた。
- 幼稚園児との交流活動を行い幼小の連携を図ることで、幼小間の段差をなくし、幼稚園から小学校への連続した成長を見通し、適切な支援をすることができる。
- 幼小交流活動を意義あるものにするためには、事前や事後の幼稚園、小学校の教員間の十分な共通理解が必須である。両者が連絡を取り合い、時間を確保する努力が必要となる。